様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 1 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520422
研究課題名（和文）　大規模コーパスを用いたメタファーの創造的概念形成メカニズムに関する研究
研究課題名（英文）　A Large Corpus-Assisted Study of Metaphor with Special Reference to Its Creative Function and Conceptualization

研究代表者
大森　文子（OMORI AYAKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：70213866

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、感情を司る概念メタファーの体系性について研究した。用例を大規模コーパスから収集、分析することにより、感情プロトタイプについて、認知言語学の伝統的方法論であった内省的なデータ分析の方法に基づく定説を覆す新たな主張を提示した。また、個別感情について従来認識されていなかった類義や対義の関係を解明し、コーパス分析の方法論が認知言語学におけるメタファー研究に大きく寄与することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is an attempt to clarify the systematic nature of the mappings which construct metaphors of emotions. Through analyses of a number of citations of conventional metaphors retrieved from large electronic corpora, I have proposed an alternative to the long-accepted idea on the prototype of emotion formed by the introspective method adopted to traditional cognitive linguistic studies. This study has also revealed unexpected relationships of antonymy and synonymy among the emotions. The search results imply that proper use of corpus data can bring important insights and that corpus methodology will make a valuable contribution to cognitive linguistic theories of metaphor.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：認知言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：概念メタファー、感情、コーパス、プロトタイプ、対義、類義、イディオム、視点

１．研究開始当初の背景

本研究の理論的背景は、認知言語学者 George Lakoff およびその共同研究者たちの研究である。哲学者 Mark Johnson との共著 *Metaphors We Live By* (University of Chicago Press, 1980) は、日常言語に偏在し、言語のみならず思考に影響を与えるメタファーの体系性と一貫性を主張した。本研究代表者が翻訳者の一人として邦訳に携わった Lakoff の大著 *Women, Fire and Dangerous Things* (University of Chicago Press, 1987) は経験基盤主義に基づく認知意味論を打ち立てた。文芸評論家 Mark Turner との共著 *More than Cool Reason* (University of

Chicago Press, 1989）は、詩的メタファーが日常言語を司るメタファー思考と同一の認知メカニズムに基づくことを示し、Johnson とのさらなる共同研究の成果 *Philosophy in the Flesh*（Basic Books, 1999）はメタファーを認知科学の中枢として位置づけようとする試みである。本研究は、この一連の先行研究に示された理念を継承しつつ、経験基盤主義の見地に立ち、精神の理解に関わる概念メタファー群により日常言語・詩的言語表現の形成と解釈が成立する現象を包括的に観察、分析し、当該メカニズムの輪郭と具体的機能を明示することを目指した。

本研究代表者は、本研究開始までに既に、人間の感情や知性といった精神活動を理解するためにメタファーが果たす役割について研究を進めてきた。精神活動を地・水・火・風に関わる自然現象の領域を通して理解するメタファーについての研究結果は、平成 12～15 年度に受けた科学研究費補助金（基盤研究（C））助成による研究「コンピュータ・コーパスを用いた英語および日本語のレトリックの総合研究」の成果、『認知コミュニケーション論』（大修館書店、2004）、*Approaches to Style and Discourse in English*（Osaka University Press, 2004）、『英語青年』2005 年 12 月号の特集「認知とレトリック」掲載論文「日英語のメタファーと認知」などに発表した。動物の生態を通して人間の性格を理解するメタファーについては、大阪大学大学院言語文化研究科実施の共同研究プロジェクト成果報告書『詩的言語とレトリック：認知とコミュニケーションの文学的戦略』（2005）、『詩的言語とメタファー』（2006）に発表した。この一連の成果により、本研究代表者は、人間が経験する自然界における諸現象についての知識を用いて感情や知性という抽象的な領域を理解するメタファー認知のメカニズムを体系的・包括的に解明することが可能であるとの仮説を立てるに至った。

２．研究の目的

メタファーによる外界理解のメカニズムの究明は、認知言語学の主要な研究テーマの一つとして位置づけられる。本研究課題は、思考を司る概念メタファー(conceptual metaphor)を反映する言語データを、英語及び日本語の大規模電子コーパスから網羅的に収集、分析することにより、抽象的概念領域（目標領域）を具体的概念領域（根源領域）からのメタファー写像により理解する人間の創造的概念形成のメカニズムの解明を目指すものである。

本研究では、調査する根源領域を＜自然界＞、目標領域を＜精神活動＞、とくに＜感情＞とし、それぞれの概念領域に属する諸概念の性質およびそれらの関係について人間が知識の中でどのように位置づけ、整理しているのか、そして＜自然界＞という根源領域の構造が＜精神活動＞という目標領域にどのように写像されるのか、メタファー写像に関与する根源領域の諸要素にはどのような役割分担があるのか、多種多様な表現事例の詳細な分析を通して包括的に究明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、分析の対象とするデータをコンピュータ処理された大規模電子コーパスから収集した。昨今はコーパスによる言語研究が盛んであり、その成果は *Macmillan English Dictionary*（2002）や *Longman Dictionary of Contemporary English*（2003）などにも反映されている。電子コーパスをメタファー研究に用いることの意義とその方法論については Alice Deignan 著 *Metaphor and Corpus Linguistics*（John Benjamins, 2005）が詳細に論じている。本研究ではこれらをふまえ、コンピュータがもつ大規模の記憶容量と高速処理能力を利用し、メタファーのデータを大量に収集、調査し、精度の高い分析結果を提示することにより、認知的メタファー論の理論的精密化を図った。現代英語 1 億語の大型コーパス British National Corpus（BNC）を主たる調査対象とし、新聞コーパス The Times Digital Archive 1785-1985 や英訳聖書コーパス The Bible in English（Chadwyck-Healey)を援用し研究した。

本研究では 2 つの下位テーマを設けた。

(1)「＜自然現象＞から＜精神活動＞への写像の仕組みに関する研究」
地、水、火、風に関連する自然現象についての人間の知識が精神活動の諸領域の理解に用いられるメタファーの仕組についての研究である。このテーマについては、研究代表者（大森）が主として担当し、研究分担者（渡辺）が副担当として補佐した。

(2)「＜動物界＞から＜精神活動＞への写像の仕組みに関する研究」
動物の名称や動物の生態、行動についての知識が精神活動の諸領域の理解に用いられるメタファーの仕組についての研究である。本テーマについては、研究分担者（渡辺）が主として担当し、研究代表者（大森）が副担当として補佐した。

４．研究成果

(1)「＜自然現象＞から＜精神活動＞への写像の仕組みに関する研究」の成果として、研究代表者（大森）は、この 2 つの概念領域

に由来する2つの名詞句が前置詞ofで結びつく慣用メタファー表現例を中心に収集、分析し、「感情カテゴリーにおけるプロトタイプ性を＜水＞という概念領域の観点から特徴づけることができる」、「感情を根源領域の欠如という観点から特徴づけることができる」など、従来の認知言語学研究にない新たな研究成果を得た。この成果は日本認知言語学会第8回大会（2007、於成蹊大学）で口頭発表し、5点の論文として発表した。

さらに、認知言語学において感情メタファーに関する研究の第一人者として知られるZoltán Kövecses の、最も強力な感情メタファーと感情のプロトタイプに関する主張を批判し、感情を表すメタファーのうち、比喩媒体を示す名詞と感情を表す名詞が前置詞of で結ばれた慣用表現を BNC で検索した結果、この慣用メタファーにおいては＜自然現象＞をその根源領域とする頻度が最も高く（表1)、その中でも海や河川などの＜水＞がメタファーに用いられるケースが最も多いことを示し（表2)、新たな認知モデルを提示した。

Source	N	Examples
NATURAL PHENOMENA	102	*wave of emotion, outbursts of feelings*
SUBSTANCES or SMALL OBJECTS	41	*mixture of emotions, residue of feeling*
A CONTAINER	38	*depth of emotion, recesses of feeling*
A MOVING OBJECT or A VEHICLE	17	*switchback of emotion, swings of emotions*
A LIVING ORGANISM	14	*maggots of feeling, bud of feeling*
TEXTILE or THREADS	13	*tangle of emotions, tapestries of emotion*

表1「比喩媒体+ *of* + *emotion(s)* / *feeling(s)*」形式のメタファー表現における主要根源領域

Source	N	Examples
AIR	9 (8.8%)	*crosswinds of emotion, outbursts of feelings*
WATER	76 (74.5%)	*wave of emotion, tide of feeling*
FIRE	7 (6.9%)	*flash of emotion, inflamed rush of feeling*
EARTH	10 (9.8%)	*volcano of emotion, caverns of feeling*

表2「＜自然現象＞領域に由来する媒体 + *of* + *emotion(s)* / *feeling(s)*」形式のメタファー表現における根源領域

さらに、個別感情を表す慣用メタファーについて同様の手法で分析し、その写像の傾向について、＜水＞が根源領域として用いられる頻度を基準として比較した結果、個別感情には感情のプロトタイプに近いものと遠いものがあることがわかった。各感情で用いられた根源領域の割合をグラフ化すると以下のようになる（図1)。

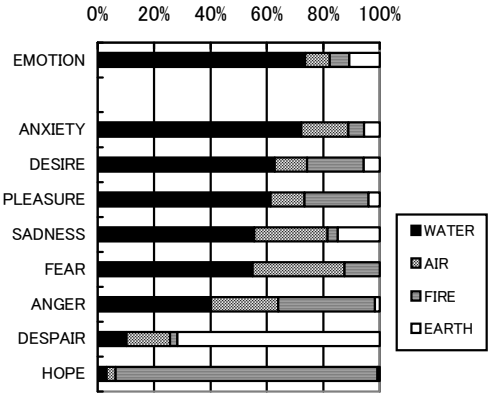

図1「＜自然現象＞領域に由来する媒体 + *of* + 個別感情」形式のメタファー表現における根源領域の割合の比較

本研究成果は世界の著名な研究者の最新成果が掲載されるメタファー研究総合誌 *Metaphor and Symbol* に掲載された。この論文は国際的に評価され、Peter Lang 社から刊行されている言語学研究シリーズ Łódź Studies in Language の第20巻 *Perspectives on Emotion*（Paul Wilson 編）に執筆を依頼された。そこで、＜喜び＞、＜悲しみ＞、＜希望＞、＜恐怖＞、＜絶望＞といった個別感情を表す慣習メタファーにおける写像の体系的特徴について考察し、一般的に対義や類義と認識されていない感情ペアの意外な関係が写像の構造の観点から明らかになることを解明し、論文にまとめた。本書は現在印刷の最終段階で、まもなく刊行される。また、この研究については2011年6月の関西言語学会で招聘発表として報告することになっている。

(2) 「＜動物界＞から＜精神活動＞への写像の仕組みに関する研究」の成果として、研究代表者（大森）は動物寓意詩を認知的に分析するとともに、英語イディオムにおける動物比喩義に関する体系的分析を行い、特定の感情の喩えとして用いられる動物用語の傾向から＜動物＞領域と＜感情＞領域との間の写像の構造性を探究した。さらに、文学テクストコーパスとしてミルトンの長編叙事詩 *Paradise Lost* を対象にし、聖書由来の＜善＞や＜悪＞の概念を目標領域とし、＜天体＞や＜動物＞など自然界の事象を根源領

域とするメタファー写像がサタンの堕落に関する物語の理解に果たす役割について考察した。ここでも、自然界の事象に関する文化的理解に基づく「視点の移動」という観点からメタファー写像を特徴づけるという、新たなタイプの研究成果が得られ、サタンの感情の変化と比喩媒体の間に相関関係があることを解明した。

研究分担者（渡辺）は、英語の鳥名、昆虫名、イヌ科名詞、ネコ科名詞を媒体とする動物メタファーについて、大規模コーパス（BNC）、新聞コーパス（Times Digital Archive）、16 世紀から 21 世紀にかけての連語・諺・イディオム辞典類、および文学作品テクスト、特に Shakespeare を対象として包括的研究を実施した。本研究は学界から高い評価を得て、日本英語学会全国大会シンポジウム「これからのコロケーション」（2009、於大阪大学）において「英語史とコロケーション」のテーマを論ずる講師に招聘され、連語の観点から動物名比喩の歴史性と構造性を示した。さらに、このシンポジウムで司会を務めた堀正広氏（熊本学園大学教授）から、コロケーション研究の歴史・現状を俯瞰し今後の研究の展望について提言する専門書『これからのコロケーション研究』への執筆を特に依頼され、第 4 章を担当した。本書は現在印刷の最終段階で、ひつじ書房よりまもなく刊行される。

(3) 認知言語学におけるメタファー理論にコーパス言語学の方法論を導入することによりメタファー研究の新展開の原動力となった重要文献である Alice Deignan, *Metaphor and Corpus Linguistics* (2005, John Benjamins) の翻訳書『コーパスを活用した認知言語学』を、本研究課題の研究分担者渡辺秀樹を代表とする翻訳グループ４名で大修館書店から刊行した。本書は感情メタファーや英語動物名の人間比喩用法についても詳細に論じており、本研究課題と密接な関係がある。研究代表者・分担者は、ともに本研究課題における研究成果を翻訳書の脚注に盛り込み、学術書として原著を上回る密度の高さをもつ翻訳書を刊行することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①Ayako Omori, “Conventional Metaphors for Antonymous Emotion Concepts,” *Perspectives on Emotion (Łódź Studies in Language 20)*. ed. by Paul Wilson, Peter Lang, Frankfurt am Main. 2011.（印刷中）査読有

②渡辺秀樹「英語史とコロケーション」『これからのコロケーション研究』堀正広編（第 4 章）ひつじ書房．2011.（印刷中）査読無

③大森文子「堕天使の変容と感情：*Paradise Lost* におけるメタファーの構造性をめぐって」『文化とレトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』大阪大学大学院言語文化研究科．pp.21-34. 2011．査読無

④渡辺秀樹「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック：動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』大阪大学大学院言語文化研究科．2011. pp.1-20. 査読無

⑤大森文子「讃美のメタファーの形式と意味：Shakespeare の *Sonnets* における太陽のメタファーをめぐって」『意味と形式のはざま』英宝社．2011、pp.281-294.　査読無

⑥大森文子「シェイクスピアのソネットにおける愛と賞讃のメタファー：6 つの翻訳をめぐって」『レトリックの文化と歴史性（言語文化共同研究プロジェクト 2009）』大阪大学大学院言語文化研究科．pp.15-28. 2010.査読無

⑦大森文子「メタファーに見る感情のプロトタイプ特性」『英語フィロロジーとコーパス研究：今井光規教授古希記念論文集』渡部眞一郎、細谷行輝編、松柏社. pp. 489-501. 2009. 査読無

⑧大森文子「イディオムと詩的表現に見られる動物を媒体とした感情メタファー：共同研究　英語動物名のメタファー（11）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み（言語文化共同研究プロジェクト 2008）』大阪大学大学院言語文化研究科．pp. 23-36. 2009.　査読無

⑨渡辺秀樹「名詞 *cat* を含む諺・成句・イディオムと人間比喩義の構造：共同研究　英語動物名のメタファー（10）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み（言語文化共同研究プロジェクト 2008）』大阪大学大学院言語文化研究科．pp. 5-21. 2009.　査読無

⑩渡辺秀樹、大森文子「19 世紀英国児童向け動物寓意詩 3 編　テキスト・全訳・語注・動物名人間比喩義対照表・メタファー分析：共同研究　英語動物名のメタファー（9）」『メタファーとスキーマ（言語文化共同研究プロジェクト 2007）』、pp. 5-39. 大阪大学大学院言語文化研究科、2008．査読無

⑪Ayako Omori, “Emotion as a Huge Mass of Moving Water,” *Metaphor and Symbol*, vol.23, no.2. pp. 130-146. 2008.　査読有

⑫大森文子「メタファー研究の方法」『言語文化学への招待』木村健治・金崎春幸編、大阪大学出版会．2008．pp.280-292.　査読無

⑬大森文子「感情が形づくる心の風景：“a flood of joy” 型メタファー表現に見る写像の特性」『日本認知言語学会論文集』第 8 巻．pp. 285-294.　日本認知言語学会．2008．査読無

⑭大森文子「感情に関するメタファーと写像の特性：“a flood of joy” 型の表現をめぐって（2）」『文化とレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2006）』pp. 5-19. 大阪大学大学院言語文化研究科、2007．査読無

⑮大森文子「自然現象と感情のメタファー写像：“a flood of joy” 型の表現をめぐって」『言語と文化の展望』pp. 639-655. 英宝社. 2007. 査読無

⑯渡辺秀樹「メディア英語の犬品種名メタファーの構造 *poodle* と *rottweiler* を中心に：共同研究　英語動物名のメタファー(7)」『文化とレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2006）』pp. 31-44. 大阪大学大学院言語文化研究科、2007．査読無

⑰大森文子「メタファーのダイナミクスと視点：*Paradise Lost* の叙事詩的比喩をめぐって」『ことばと視点』pp. 5-19. 英宝社. 2007. 査読無

〔学会発表〕（計６件）

①渡辺秀樹　シンポジウム第 10 部門「*Beowulf* と日本人の研究」企画と総論担当. 日本英文学会第 82 回全国大会、2010 年 5 月 30 日、於：神戸大学.

②渡辺秀樹　シンポジウム「これからのコロケーション」（堀正広司会）「英語史とコロケーション」担当.日本英語学会第 27 回大会、2009 年 11 月 15 日、於：大阪大学.

③Hideki Watanabe, “The Polysemous and Ambiguous Compounds in Beowulf Reconsidered with Special Reference to the Doppelformen Denoting Weapons"　国際英語史学会(The Society of Historical English Language and Linguistics) 第 2 回大会、2009 年 9 月 9 日、於：名古屋大学.

④Hideki Watanabe, “Grendel’s Approach to Heorot Revisited: Repetition, Equivocation and Anticipation in Beowulf 702b-727” 国際英語史学会（The Society of Historical English Language and Linguistics）第３回大会､2009 年 8 月 29 日、於：広島大学.

⑤渡辺秀樹　シンポジウム「中世英語・英文学を問う」第 1 講師　題目「日本における *Beowulf* 研究史 80 年を振り返る」日本英文学会第 79 回全国大会、2008 年 5 月 19 日、於：慶應義塾大学.

⑥大森文子「感情が形づくる心の風景：“a flood of joy”型メタファー表現に見る写像の特性」日本認知言語学会第 8 回大会、2007 年 9 月 23 日、於：成蹊大学.

〔図書〕（計１件）

①渡辺秀樹、大森文子、加野まきみ、小塚良孝『コーパスを活用した認知言語学』（翻訳）大修館書店. 2010.　290 ページ．pp. 1-290.

６．研究組織

(1)研究代表者

大森　文子（OMORI AYAKO）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：70213866

(2)研究分担者

渡辺　秀樹（WATANABE HIDEKI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：30191787

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：